公立大学法人
福岡女子大学広報
FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY MAGAZINE

No.110 | 2020 SPRING

福女大改革の10年と、その先に向かって
理事長・学長　梶山 千里

特集
福岡女子大学の現代史

My life
株式会社 福岡銀行 人事部部長 ダイバーシティ推進室長
高鍋 優子さま

20歳（ハタチ）の原点

毎回、福岡女子大学に縁のある方々を紹介します。
あの人は20歳の頃、どんなことを考え、
どんなことに迷い、どんな選択をしてきたのか
若き日のLIFE STORY

附属図書館
ラーニング・コモンズ コーディネーター
金光 真美 KANEMITSU MAMI

大分県湯布院出身
大分市→大阪→愛知→大分市ののちに、1979年本学旧文学部英文学科入学。卒業後は金融系企業に勤務。1999年、家族の渡米に帯同し、3年半メリーランド州で過ごす。帰国後、FRC福岡帰国子女の会（ボランティア団体）に入り運営にかかわる。2017年より母校に戻りラーニング・コモンズコーディネーターとして勤務。

私が大学を目指す頃は、今のように情報を得やすい時代では無かったので、いざ入学という時に、すり鉢状の大きな講義室がないことや、入寮予定の寮が女専時代からの木造平屋建築でとても驚いたものです。バブル期の予兆もあってか、「花の女子大生」という言葉もおどり、女子大学人気が絶頂でしたが、世の華やかな女子大生イメージをよそに、レトロそのものの寮で過ごす私たちの日々はのどかなものでした。

音大を目指した時期もあった私は、寮生活が始まると、自室で音楽が楽しめないことに気づきます。何とかピアノに触れる方法はないかと立ち寄った楽器屋で、壁に貼ってあった「メンバー募集」の紙をたまたま目にして、運命のバンド加入。SNSもない時代、何の情報もなく初対面した彼らは、全員同年代の九大生でした。

クラシックピアノを弾いていた私がどんな音楽に出会ったかという説明は、語ったところで、知る人はほぼいないと思うのですが…自分たちの周りに限っていうと、EUではギャング・オブ・フォー、USならトーキングヘッズ、日本ではYMOが流行っていたので、私たちは、その流れをくむローカル版という位置づけで、100本に及ぶライブの合間には、プロの前座や誌上対談なども舞い込んでいました。

音楽だけではなく、漫画を読むならガロ系、映画を観るなら日仏学館で、という、レアなカルチャーに囲まれる毎日でした。

音楽を続けていたいという気持ちを抱きつつ就活期に突入…かくして、早々に単位を取り終えた私は、最初に内定をくれた会社に決め、安心して音楽活動に精を出しました。その後、個々の事情もあって、バンドの形は変わりますが、就職後も、美術展や演劇の音楽を依頼されたり、時には書道や和楽器とのコラボで即興ライブを企画するなど、多くの人と関わりながらイベントを実現するうちに、人前に立つことよりも、作品を仲間と作っていく過程や、企画を形にすることに魅力を感じていることを自覚していきます。

実は、就活の頃の自分は、目標を絞りきれず、散漫な状態だったと思いますが、そこで悩まずにすんだのは、中学までの多くの転校で鍛えられた適応力のおかげであったかもしれません。素晴らしい適応力があるというよりも、一旦、自分のハードルを下げて、自己肯定感を維持しつつ、時間がかかっても風通しのよい状況をつくる、という術を身につけていた気がします。高校での下宿生活、大学での寮生活、就職先やのちのアメリカ暮らしでも、悩みをスルーする力は支えとなりました。就活時の散漫度も、自分の多面性として良きに捉え、きっと縁のあるところに決まるだろう、とお気楽に考えていた自分がいたことでしょう。

ところで、当時の大学寮は自治寮で、運営は学生に任されていました。副寮長だった私は、寮長が休学したことで、ここでも音楽活動同様、運営や企画に深くかかわることになります。

年を重ねると、企画力やマルチタスクをこなせることが、大企業のプロジェクトやプレゼンの場面でなくとも、日常的に有効だと気づかされます。誰しも、自分のスケジューリングやセルフマネジメントをしているわけで、そこを磨いてマルチタスクをこなせるようになっていれば、自分も楽ですし、さらに企画力が備われば、家庭でも家族を、コミュニティでも関係者を楽しませることができ、自分も生きがいを感じられる、という実に当たり前のことを実感している還暦の自分がいます。

そして、大学なら学業、会社なら仕事、家庭人なら家庭、といった軸足になるものだけは疎かにせずに、自己責任の範囲で余暇とのバランスをとる、という自分なりの感覚を少しずつ確立したのもこの頃だったといえます。当時は気づかずにいたことでしたが、頼まれた仕事を、メインの軸足とのバランスを考えながら請け負うことで、自分が成長できる機会にもなったし縁もふくらんできた、と思いあたることが多々あります。

今でも定期的に集まる、大学の同級生や音楽仲間、会社の仲間はまさにそういった中で出会えた大切な友人です。中でも、入学以来3年に渡り、まさに「同じ釜の飯」を食べてきた寮友との思い出は、私にとって宝ものですが、話が長くなりますので、これはまた機会に。

思い出の本

小さい頃には、かなりの本好きでしたが、中学の頃には星新一にはまり、高校・大学になるとアートや建築の写真集を眺めるようになっていましたから、大学では英文科で与えられる本をかろうじて読むというありさまでした。ただ、卒業後ほどなく出会った、宇野千代の「生きて行く私」には、（自分とは無縁のその奔放さに驚かされながらも）エネルギーをもらったという記憶があります。

20 years old as a starting point

未来を拓く なでしこの花
100th—2023
FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY

FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY

公立大学法人
福岡女子大学
〒813-8529 福岡市東区香住ヶ丘1-1-1 Tel.092-661-2411（代表） Fax.092-661-2415
http://www.fwu.ac.jp/

公立大学法人 福岡女子大学広報誌 No.110/Spring 2020 ｜ 編集発行 福岡女子大学 戦略企画センター ｜ 2020.3 発行

出発

黒田三郎

どこか遠くの方から見ていたい
感動している自分を
感動して我を忘れてとんでゆく自分を
どこか遠くの方から見ていたい

息を切らしてしまってはいけない
よそ見をしてはいけない
心ひそかにそう念じながら
どこか遠くの方から見ていたい

あおいじつにあおい
その遠くの空の彼方へ
今はそれだけが私の仕事だ
荒々しく私は私を投げつける
紋白蝶のようにかるがると行ってしまうようにと
眼をとじながら私は私を投げつける
足元に落ちて高雅な陶器のように砕けないようにと

黒田 三郎（くろだ さぶろう）（1919〜1980）

詩人。広島県呉市生まれ。鹿児島市で育つ。東京大学経済学部卒業。中学（旧制）から詩作を続け、1954年に結核と闘いながら発表した最初の詩集「ひとりの女に」でH氏賞を受賞。娘との日常生活を詠んだ「小さなユリと」、「失はれた墓碑銘」などを発表。1980年、60歳で病没。

『黒田三郎詩集』（現代詩文庫）思潮社より

公立大学法人
福岡女子大学広報
FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY MAGAZINE
No.110 SPRING 2020

CONTENTS

03-04 福女大改革の10年と、その先に向かって 理事長・学長 梶山 千里

05-08 特集 福岡女子大学が持つ歴史と伝統。そしてこれからについて。
福岡女子大学の現代史

09-11 My life
株式会社 福岡銀行 人事部部長 ダイバーシティ推進室長
高鍋 優子さま

12 研究室紹介 国際教養学科 櫻木 理江

13-14 世界歴史探究！ 近・現代史のすきまを埋めよう〜韓国編〜
名古屋大学大学院法学研究科・教授 福岡女子大学・元教授 岡 克彦

15-17 FWU TOPICS

18 公開講座、社会人学び直しプログラム

19-20 退職者からのメッセージ、人事消息

21-22 福岡女子大学100周年記念事業

福女大改革の10年と、その先に向かって

公立大学法人福岡女子大学 理事長・学長　梶山 千里

２０１１年の教育制度抜本改革から10年目である２０２０年は、一つの節目の年となります。10年間で教育の基盤を作る努力をしてきましたが、２０２０年はこの成果を基礎に、教育の創造空間に飛び立つ年にしたいと願っています。

２０１１年以降、本学では「建学の精神：次代の女性リーダーを育成」という言葉を使ってきました。福岡県立女子専門学校開校時には、いくつかの立派な言葉が残されており、その中には「女性リーダー育成」を実現したいという気持ちが読み取れますが、明確な言葉として残されていません。そこで２０１１年の教育改革の過程で、当時の教職員が建学の精神に関して検討し、自然発生的に「建学の精神：次代の女性リーダーを育成」という表現に成ったようですが、大学が正式に決めたことではありません。そこで２０１９年度に再検討した結果、「大学の基本理念：次代の女性リーダーを育成」とすることに決めました。

本学は２００６年に法人化し、他の女子大学との差別化や大学自身の危機感のため、独自の「ユニーク」を持つ努力をしてきました。教育改革を進めた２０１１年以降、学生はいくつかの教職員委員会に加わり、大学の経営・運営にも関わっています。学生は大学の組織の一員であると本学では位置付けています。本学は、ここ10年間の学生に対する人間力、国際力の教育の過程で、自分で判断して行動する学生育成に努力してきました。２０２０年以降は、教職員・学生は切れ目の無い次の向上目標を決め、努力して欲しいと願っています。教育の向上は「限り無い前進」です。このスローガンが今の本学の教育進化に最も相応しいと思っています。

Ⅰ．大学の飛躍のために、２０１９年までに何をしてきたか。

（1）学生の授業理解度を深める努力

授業の理解を深めるという大学教育で最も重要な指導を行っています。本学は、２０１８年より全学一斉のクォーター制を実施しています。クォーター制では、学生は同じ科目の授業を週複数回受けていますので、授業の内容が継続して頭に残り、復習・予習を今まで以上に有効に行うことができます。更にクォーター制の実施により、クイズ（non-announced exam.）を頻繁に実施できる為、学生はクイズの為の準備でウィークデーは、常に復習という緊張が必要となります。クイズは学生の授業内容の理解度を深める実質的手段になっていると確信しています。また本学の特徴は、授業スタート前の教員と学生の授業内容に対する徹底討論です。この科目の授業で教員は何を教えたいか、学生は何を学びたいか、互いに理解した後に、授業がスタートするという世界の大学でもあまり例のない授業前討論を実施しています。クォーター制の実施による週複数回の授業、更にクイズの実施による学生の緊張感、授業スタート前の教員・学生の授業に対する討論は、授業内容理解に非常に役立っていると考えますが、その効果を学生に対するアンケートでチェックしたいと思っています。

（2）精神文化を持った女性リーダーの育成

福女大美術館の整備と学生への感性教育の開始は、学生に対する精神文化の醸成・育成への挑戦と受けとめています。精神文化の醸成の結果として生まれた「感性学」を、人間性の確立に使っている大学は、日本にはそれ程多くありません。本学はこの難題にいち早く取組み、多くの仕掛けをしてきました。福女大美術館には、高価な美術品はありませんが、感性教育に対して、非常に価値のある美術品であると理解しています。福女大美術館の存在によって、文化庁、内閣府、県などと「心」に関する教育で連携しています。現在は、県と本学で市民を巻き込んだ「感性」に関する様々な催しを始めています。「感性」の授業は、数年後に始める「歴史」授業と共に、日本の大学の教養教育の基幹になると信じています。学生は、これらの授業に対する充分な理解に努力し、自分自身でその重要性を理解して欲しいと願っています。

（3）教職員の進化と学生の努力

教職員によるクォーターサバティカルの提案等や、情報の教育の充実のための「国Ｃｙ教育」、大学が何かを生み出す「０→１大学」の提案等は、今後大学の進化に必ず繋げて行きたいと思います。教職員が積極的に提案する大学になったことに進化を確信し、更に教職協働による今後の事務組織改革の効果にも注目したいと思っています。香住ヶ丘地域との連携により多くの相乗効果が表れていることにも、留学生を含む学生の皆さんに感謝します。２０１９年も、国連女性の地位委員会インターンに本学学生が選抜され、２０１６年、２０１７年に引き続き、学生が国際的女性リーダー育成に積極的に参加しています。教職員の提案と学生の国際活動の積極的参加は、本学の改革・改善の効果の表れと信じています。

（4）大学ランキング

（1）～（3）に挙げた２０１９年の教職員・学生の努力は、福女大ブランドとして大学評価を著しく高めています。THE（Times Higher Education）世界大学ランキング日本版によると、本学の教育・国際は非常に高く評価されています。２０１７年以降、約80校ある日本の女子大学のうち、本学は、常に1～3位に入っています。上位3校は国公私1校ずつで、関東の2つの大学と本学です。２０２０年からこれら3大学での連携を強めたいと願っています。また、日本の大学は約７８０校（２０１９年11月現在）ありますが、本学は常に50位くらいであり、２０１９年には46位という評価になっています。本学は非常に小規模な大学ですが、ここ10年間で、ここまで成長したことに、誇りをもって良いと思います。

Ⅱ．２０２０年以降、大学と教職員・学生は何をする？

（1）教職員・学生の更なる進化

ここ10年間の教職員・学生の努力で本学の教育・国際の評価は、世界でも例の少ないスピードで進展してきました。教職員・学生が、個人やグループの意見を大学・社会に提案することに慣れてきたことに、教職員・学生の明確な意識改革だと考え、学長の私は非常に誇りにしています。大学の改革・改善が、社会の変化より数倍早い時に、外部から評価を勝ち取ることが出来ます。今後、継続的に進化するには、今以上の努力とスピードが不可欠です。その理由は、大学が発展・進化する毎に、評価基準値が上がり、従来と同じ努力では、結果的には新しい基準値では評価が低下するからです。社会から見れば、大学の積極的発展・変化が目に見えない限り、評価してもらえません。

（2）「新しいユニーク」の提案

本学は、日本の大学ではあまり例のない「ユニーク」を提示しながら大学全員で様々な努力をした結果、社会から進化を認められる段階まで発展してきました。しかし、最近では、全寮制を始め本学の「ユニーク」と同じことを実行・実施する大学が出てきました。ここで「新しいユニーク」の2つの定義を示しておきます。「新しいユニーク」の1つは、新分野・領域での「新しいユニーク」設定です。更に、２０１９年まで実施してきた「ユニーク」の目標値の高めの設定も、「新しいユニーク」の1つと考えています。

２０１９年までに本学が実施した「ユニーク」として、以下に示す「国際」「教育」「大学組織」に纏めてみました。

「国際」では、全寮制（寮での留学生比率約33％）、学生の短中長期留学率75～80％、海外高等学校（ベトナム、タイ）との高大連携、ASEAN-EU Consortium と WJC（The World of Japanese Contemporary Culture Program）の継続があります。

「教育」では、精神文化の醸成（福女大美術館、薪能、ノーベル賞受賞者の高校生向け講演、社会的弱者支援）、感性授業、Language-Café（9ヵ国語）、授業理解度向上の工夫、学生の大学経営・運営参加、留学生の比率12～15％（寮では約33％）、国連女性の地位委員会インターンへの学生参加、女性リーダー・トップリーダーの育成があります。

「大学組織」に関しては、委員会終了時の議事録作成、行動規範等を記載したＵＩマニュアルの教職員・学生の常時携帯、職場の女性比率の設定（現在、執行部の40％を２０２３年には50％へ、現在、上位教員（教授+准教授）の35％を将来は更に向上）、No smoking campus、２０１１年以降の総床面積90％のキャンパス再整備（床面積を2倍）、１００周年記念事業（「女性リーダーシップセンター」と「国際フードスタディセンター」の構築があり、「福女大フィルハーモニーオーケストラ」の立ち上げ）、従来の学部教育とこの2つのセンターを縦・横軸に交叉して使う文理統合教育があります。

これらのユニークの中で、既に「ユニーク」でなくなったものもあります。「新しいユニーク」の提案と質の向上を含む継続「ユニーク」が「新しいユニーク」と理解し、「次なるユニーク」に挑戦します。

（3）１００周年記念事業の展開

本学は２０２３年に創立１００周年を迎えます。１９２３年に我が国最初の公立女専の福岡県立女子専門学校として開校して以来、１３，８７３人（２０２０年３月の春卒業迄）が卒業し、多くの卒業生が国内外で活躍しておられます。当たり前のことですが、各大学の１００周年は一度しかありませんので、どの様な仕掛けをするかで次の１００年の大学の進展が決まります。本学は、「女性リーダーシップセンター」と「国際フードスタディセンター」で、研究の質を高めると共に文理統合教育を進めていきます。

２０２０年は、本学の教育全面改革をした２０１１年から10年目です。大学は10年の時間を掛けて変革し、成果を蓄積しながら、継続的な改革、改善していかないと流大学の仲間入りは出来ません。大学の存在意義は、教育・研究の質の向上であり、継続的に質の良い教育を提供できる大学として更に前進していきます。

国際教養学科 准教授
渡邉 俊
日本史学を担当。学長補佐。
本学の100周年記念誌編纂を担当。

国際教養学科 教授
今井 明
和歌文学、談話文学、
軍記物語を担当。
1992年より本学に勤務。

環境科学科 教授
庄山 茂子
環境デザイン学、色彩心理学、
被服心理学を担当。副学長。
本学卒業生。

特集 ― 福岡女子大学が持つ歴史と伝統。そしてこれからについて。

福岡女子大学の現代史

1923年に我が国最初の公立女専として福岡県立女子専門学校が開校。3年後に創立100周年を迎える現在まで、実に13,000人以上もの卒業生を送り出してきました。そのような本学の、これまでのこと、これからのことを語っていただきました。

2011年から始まった本格的な大学の改革。

渡邉俊准教授（以下渡邉）：今回は「福岡女子大学の現代史」ということで、みなさんに集まっていただきましたが、1980～1990年代の本学について教えてください。

今井明教授（以下今井）：私の着任が1992年なので80年代の本学の様子についてはよく知らないんです。ただ当時から、本学の高い評価は聞き及んでいました。来た当時の印象は、校舎がとてもオーソドックスでシンプルだということ、そして香椎の街がとても賑わっているということでした。お惣菜のお店や古本屋などが並んでいて、ホッとするような安心感のある街だなと感じました。

庄山茂子教授（以下庄山）：私は1984年に本学を卒業しました。校舎は、グレイの外壁で現校舎のような明るさはありませんでしたが、落ち着いた印象でした。また、香椎の街は、大学生やショッピングを楽しむ人々で大変賑わっていました。30数年ぶりに香椎に戻ってきましたら賑わいが失われたように感じました。香椎浜やアイランドシティの方に賑わいが移っているのでしょうか。現在、地元の皆さまがさまざまなイベントを企画し、香椎の街の活性化に取り組まれていますので、本学も協力していきたいと思います。

渡邉：私が着任した2011年は、かなり校舎が老朽化していました。あとは机や椅子なんかが、高校に近い感じだなと思いましたね。

今井：渡邉先生が来られた2011年は、建物がもう限界に近づいていた時期。2005年に福岡県西方沖地震が起きて、ガラスが割れたり、壁にヒビが入ったりしていたところもあったので、本格的に2011年から建て替えが始まったんです。そこからいよいよ本学の改革も始まりました。

渡邉：2011年に学部改組がありましたが、改組前と今とでは学生に違いは感じますか？

今井：新学部になって服装が明るい学生が多くなったなと思います。服装が変わったということは、おそらく内面的なものも変わっているんでしょうね。

庄山：私の学生時代は、海外留学する学生はほとんどいませんでした。県内で就職する人が多く、遠くても関東くらいまで。現学生は海外を視野に入れて就職を考えており、大変行動力があるように思います。

国際化の波を見据えた全寮制という取り組み。

今井：80年代あたりから少しずつグローバリゼーションという波が押し寄せてきていました。本学としても、国際化を目指した教育に対応しなくてはいけなくなりました。けれど、二言で国際化といっても具体的にはどうすればいいのかということになったときに、留学生と暮らす「全寮制」の国際教育寮というワードが出てきたんです。

渡邉：今となっては珍しくないのかもしれませんが、２０１１年当時、大学で全寮制というのはとても先駆的な試みだったと思います。

今井：それまでは学生同士の関係は希薄なところがあった気がします。従来もサークルなどでは触れ合っていたと思いますが、そのような限られた時間だけでなく生活を共有することでコミュニケーション能力を育てていきたいという考えがありました。また、これまでの学生は言われたことは完璧にできる優秀さはありましたが、これからの時代に必要なのは、自発的に行動できる能力。そういった力を身につけるためにも、１年間の全寮制は、学生にとって非常に良いシステムだと思いますね。

渡邉：留学生も一緒に生活することで、異文化理解も深まりますよね。

庄山：私の時代は、教育寮というより生活寮という感じでした。留学生と共に過ごす寮生活の経験は、実社会で活かせると思います。また、寝食を共にした仲間は深い絆でつながりますので、異文化理解と共に絆が世界に広がっているはずです。

福岡女子大学全景（1988年）

次代の女性リーダーに必要なものとは？

渡邉：本学の基本理念として『次代の女性リーダーを育成』というものがありますが、それについてはどうですか？

庄山：本学では、多様な経験を積んでもらうために体験学習や学外での活動をカリキュラムに入れています。座学だけでは得られない国内や海外での体験は、国際的な視野や幅広い教養を備え、実践力を持った人材育成につながっていると思います。

渡邉：リーダーというと私は「私についてこい」というようなイメージを持っていたんですが、本学に着任してからそれは覆されましたね。国際化や多様性に富んだ今の時代に合ったリーダー像を追求していかなくてはと感じています。

今井：これまでは大人の言うことが正解というところがありましたが、今の時代はその大人ですら間違うし、不安を抱えている。だからこれからは、「どうなるかわからないけれどやってみよう」という気持ちがリーダーには必要だと思います。失敗を恐れずに、自分の人生を自分で切り拓ける人、学生たちにはそういう大人になって欲しいです。

リーダー育成に欠かせない『福岡女子大学論』と感性教育。

庄山：女性リーダーの育成を語る上で欠かせないのが２０１９年から始まった『福岡女子大学論』だと感じています。これは本学の長い歴史と伝統を学び、受け継がれた精神を理解することで、自分が本学の歴史の一員だという誇りを持って、責任ある行動をするために開設されたものです。この講義には、社会で広く活躍する卒業生を講師として迎えています。

今井：そういった自信や誇りは、リーダーに必要なものですね。過去を知ることは、未来へ進む力を生み出すと思います。また、女性リーダー育成に関しては、渡邉先生が担当されている感性教育というのも非常に重要ですよね。

渡邉：人と人とのコミュニケーションは言語と感性によって築かれていると思います。ですから、言語だけでなく感性を理解することはとても重要ですね。また、感性にはクリエイティブな側面があります。生物のメカニズムからヒントを得て、ものづくりに生かそうとするバイオミメティクスという研究開発分野がありますが、そもそも感性が豊かでないと昆虫や魚からアイデアを得ようなんて思いませんよね。感性を理解すると、こうした新たな価値を創造することができるのです。本学では２０１８年から感性教育を導入し、学内に美術館もオープンしました。

今井：大学というと知識を得るというイメージがありましたが、そこに感性という目に見えないものを取り入れるのは面白い試みですよね。自動車はエンジンとタイヤがあればよいのですが、それだけでは私たちは選べないんです。デザインや色があって、初めて自分の価値観で選択できる。人間と社会の動きには、感性の働きが非常に重要なんですね。

庄山：食事も栄養さえ摂れれば良いというわけではありません。やはり味や色、盛り付けによって美味しい、楽しいという感性につながります。こういった自分の感性に気づいて、最終的には他者を思いやる気持ちにつながって欲しいですね。

今井：「美味しい料理を食べて欲しい」とか「楽しい気持ちになって欲しい」という思いやりの心は、リーダー育成にも必要なことですね。

渡邉：『福岡女子大学論』や感性教育によってこれまで見えていなかった世界を知り、自分でもまだ知らない自分に出会うことができればいいなと思います。五感を研ぎ澄まして、人間と社会の動きを感じて欲しいですね。

これからの福岡女子大学がめざすもの。

庄山：本学は２０１８年度より、１年を４つに区切るクォーター制を導入しました。これにより短期集中の講義で理解を深める、海外留学のスケジュールが組みやすくなる、多様な学外活動が可能になるなどのメリットが生まれます。

今井：全学的にクォーター制を取り入れている大学はあまりありません。新しいことを最初に行うのはとても勇気がいると思いますが、そういった将来の見通しをしているところも本学の魅力だと思います。

渡邉：本学は本当にさまざまな変革がなされたんですね。

今井：１９８０年代まで、本学は非常に落ち着いていました。しかし18歳人口の減少が騒がれる中で、さまざまなシミュレーションが行われるようになったんです。

渡邉：18歳人口は減っていくのに、大学数は増えていくという現象がありましたね。

今井：学生数を確保するために、男女共学にする女子大学も増え、公立の女子大学は本学を合わせて2校となりました。本学もそういう話が出たことはあるんですよ。けれど、やはり日本で初めての公立女子大学という誇りやプライドがあるんですね。これまで長年蓄積してきた女子教育の軸は、どれだけ時間が流れてもブレませんね。

庄山：女性が職業人として生きていくのがまだまだ難しい社会の中で、卒業生も女子大学の存在意義を理解し、存続と発展を願っています。

今井：そうですね、様変わりする時代の波に乗ることもとても大切ですが、体幹がしっかりしていないといけません。変わるもの、変わらないものを見極めて、これからの時代を担える女性を育てていく必要があると思います。

vol.04

My life

CORPORATE INTERVIEW

さまざまな業界で活躍をする
人生の先輩たちからの、
学生たちへのメッセージ。

女性らしく、活躍できる社会へ。

国際教養学科2年／
福岡大学附属若葉高等学校出身
ラクマナリエワ マディナさん

国際教養学科4年／
九州国際大学付属高等学校出身
武内 結子さん

株式会社 福岡銀行 人事部部長
ダイバーシティ推進室長

高鍋（たかなべ） 優子（ゆうこ）さま

福岡市出身。1984年九州大学文学部を卒業後、福岡銀行に入行。秘書室を経て、本店営業部へ配属になり1級ファイナンシャル・プランニング技能士の資格を取得。現在、ダイバーシティ推進室長として活躍中。趣味は仕事で始めたゴルフの練習。

とにかく目の前のことに夢中だった大学時代。

小さい頃から負けず嫌いだったと思います。幼稚園の頃って、数ヶ月違うと成長に大きな差が出ますよね。早生れの私は、周りの人よりできないことが多くて、それが不安で悔しくて、とにかく大きな声で泣いてばかりいた記憶があります（笑）。そこから今の負けず嫌い精神が生まれたんでしょうね。大学は文学部で西洋史学を学び、クラブではアーチェリーをやっていました。例えばテニスであれば、中学や高校からやっている人には絶対かないませんよね。でも、アーチェリーなら、みんな平等に大学からのスタートになる。がんばれば大きな試合に出られるかも…と考えたわけです。それに「大学でなければできない」というところにも魅力を感じました。「そのときにしかできないことを大切にする」という考えで目の前のことに夢中になっていたので、正直、就職のことは全く考えてなかったんです。男女雇用機会均等法がなかった当時、女性はクリスマスケーキ（売れるのは25歳まで）と言われていて、早期に結婚退職をする女性が多かったので、結婚適齢期（!?）まで猶予期間の短い四年制大卒の女性はあまり就職口がありませんでした。4年生の夏に就職事情の厳しさに直面したときはもうショックで…（笑）。世間知らずだったなと思います。でも、結婚する前に一度社会を見てみたいという気持ちが強かったので、いろんなツテを頼って、なんとか福岡銀行に入れてもらったという感じです。ごめんなさい、なんだか夢のないお話で。でも、これが当時の現実でした。

仕事にワクワクしっぱなしだった新人時代。

そして始まった社会生活。そんな時代だったから、私もなんとなく就職して、2年くらいで結婚して専業主婦になるのかなぁと思っていたんですが、社会に出ると知らないことばかりで、毎日がとても新鮮。「世の中って、こんな仕組みになっていたのか！」と毎日ワクワクしていましたね。ちょうど当時は福岡タワーができたり天神イムズやソラリアプラザが立ち上がったりと、福岡の街が大きく変わる頃。銀行はその全てに関わっていましたから、仕事を通じて街づくりの裏側が見られるわけです。翌日の新聞に載るような情報が目の前で飛び交う環境に、いつも心をときめかせていました。一方で、結婚したら仕事は辞めなければならないと思い込んでいましたから、「結婚したら、もうこんな経験はできなくなる。また世間知らずに戻って成長が止まってしまう。まだ仕事を辞めたくない！」という気持ちが強くなっていました。こうして目の前の仕事に夢中になっているうちに、突然、転機が訪れたんです。銀行に入って15年が過ぎた37歳のときでした。

小学校4年生の夏休み。（左）高鍋さん

訪れた転機で、存在意義を考えるように。

福岡銀行に入行して15年間、私はずっと秘書室にいました。37歳にして、初めて転勤を経験したんです。新しい職場は、富裕層のお客様の相談窓口。秘書室とは全く違う仕事で、新入行員やパートさんから仕事を教えてもらいながら、銀行の事務を一から勉強する日々が始まりました。更に、お客様からのあらゆる相談に応えられるよう、ファイナンシャルプランナーの資格を取ることも求められました。「専門知識がなければ、自分の存在意義はない」と考えて、必死に勉強し、配属から3ヵ月後に2級（ＡＦＰ）、更にその4ヵ月後に1級（ＣＦＰ）の資格を何とか取得。すると、たまたま銀行にその資格を持っている人がいなかったので、教えてもらう側から教える側に立場が１８０度替わったんです。ちょうど同じ時期に、銀行が「投資信託」の取扱いをスタートしたのも私にとってはラッキーでした。ずっと秘書室にいたので銀行業務には15年間のブランクがありましたが、投資信託は皆、ゼロからのスタートです。周りの人より先に勉強して詳しくなれば、自分が役に立てる存在になれる。アーチェリーを始めたときと一緒ですよね。負けず嫌いというか、自分の存在意義をなんとか見出そうとしていました。こうして個人営業の経験を積んで法人営業の部門に移ったのが44歳のとき。そこではＭ＆Ａ（企業の合併買収）や事業承継など、取引先の経営に深く踏み込んだコンサル業務に携わらせてもらいました。この年齢で、また新しい勉強を一から始めるのは大変でしたが、地域社会における銀行の役割を再認識できたのは貴重な経験だったと思います。その後1年間、医療融資で病院回りなどをして、また新しい世界を覗いたのち、48歳のときに支店長に就任しました。

自分を成長させるための海外体験。

銀行は転勤が多い職場ではありますが、私の場合は転勤というよりまさしく「転職」。仕事がドラスティックに変わることで、いろんなことを経験させてもらいました。もちろん最初は「自分で大丈夫だろうか？お客様に信用していただけるだろうか?」などと不安でいっぱいになります。どうすれば、お客様から「あなたの話を聞いてみたい」と言ってもらえるだろうか?と思い悩む毎日でした。そんなとき、「小手先の知識やスキルより、人間力を高めることが大切なんじゃないか」ということに気づいたんです。それには、自分の中に「人に語れるもの」をたくさん積み上げるのが一番!と考え、連続休暇には様々な出会いや経験を求めて海外に行くようになりました。それも、外国人の中に一人で飛び込んでトレッキングをしたり、遺跡巡りをしたりと、できるだけ日常とは違う世界に浸るようにしたんです。そんな経験をすると、「結構、私、どんな状況でも大丈夫かも」って変な度胸や自信がついたりするんですよ(笑)。すると、仕事も何とかなるんじゃないかなって思えるようになってくる。仕事とプライベートって分けて考えがちですが、実はつながっていて、仕事にちゃんとした「軸」が持てると、プライベートも充実する。その反対も然りだと思うようになりました。女性は結婚や出産などで人生の岐路に立たされることが男性より多いと思いますが、そんなときに仕事もプライベートもどちらも諦めてほしくない。だからこそ、両方を選び取れる環境をつくることが大切だと思っています。

誰もが働き甲斐を感じられる職場を目指して。

私が現在所属しているダイバーシティ推進室では、女性が活躍できる環境づくりを優先課題として取り組んでいます。女性が活躍するといっても、肩肘張って男性に張り合おうというものではありません。女性らしい柔らかさ、大らかさはそのままに、その人らしく働ける環境をつくろうというものです。育児や家事をこなしながら仕事をしている女性には、時間の使い方や先を読む力、後輩や部下を育てる力などが自然に備わってくると感じています。このような能力はリーダーとしてとても大切なもの。ですから、もっと自分の力を信じて、遠慮せずに活躍していいんだよというメッセージを送り続けています。また、女性の活躍推進は女性だけでできるものではありません。男性にも知ってもらうことで、家庭での家事分担、育児分担につながりますし、将来、管理職になったときに女性部下のマネジメントにも活きてくるはずです。そこで、男性も巻き込みながら、プロジェクトを進めています。女性も男性も働き甲斐のある職場環境を実現することが、最終的なゴール。そのために心がけていることは、歩みを止めないこと。ダイバーシティは大切なことですが、緊急性がないため、ついつい優先順位が下がりがちです。それでも着実に前進するためには、専担部署の私たちが常に歩み続けることが大切だと自分自身に言い聞かせています。ダイバーシティ推進室が立ち上がって6年目になりますが、徐々に女性も男性も意識が変わってきました。結婚や出産をしてもしなくても、これからは女性も自分で人生を選択する時代です。そんな女性の背中をポンと押してあげられるような取り組みを続けていきたいですね。私も57歳になって、そろそろ銀行を卒業する年齢が近づいています。これからも、銀行での経験を活かしながら、どこかで誰かの役に立てる役割を担えたらいいなと考えています。私もまだまだ夢の途中。若い皆さんには可能性も時間もたくさんありますから、特に大きな夢を描いて世界に羽ばたいてほしいです。

My life - 過去の記事 -

- 107号 2019.7 全日本空輸株式会社 上席執行役員九州支社長 大人形 綱邦さま
- 108号 2019.10 TOTO 株式会社 人財本部 人財開発部 ダイバーシティ推進グループ グループリーダー 菊竹 倫子さま
- 109号 2020.1 株式会社松下美紀照明設計事務所 照明デザイナー 松下美紀さま

地域が抱える課題に経営学の視点からアプローチ

ゼミの様子

企業を取り巻く競争環境の変化は、近年さらにスピードを増しています。企業を取り巻く環境を分析する際に用いられる分析フレームワークの1つにPEST分析と呼ばれるものがあります。PEST分析は、企業が直接的にコントロールできないけれども企業活動に大きな影響を与える4つの環境要因である、政治（Politics）、経済（Economics）、社会（Society）、技術（Technology）の頭文字をとっています。例えば、技術的な環境の変化として、近年はIT化やAIの発展が著しく、消費者の生活は大きく変わってきました。特に金融業界においてはフィンテック（FinTech）と呼ばれる金融（Finance）とテクノロジー（Technology）を組み合わせた新しいサービスの登場やその普及によって、例えば従来銀行の店舗内で人の手によって行われていた業務量が減ったり、これまでとは異なる業務への転換が迫られたりしています。

このような環境の変化に対して企業は柔軟に適応していかなければならないのですが、それを実際に戦略に落とし込んだり、従来のやり方に慣れ親しんでいる従業員の行動を変えていくことは容易ではありません。

従業員の行動が変えられない場合でも、既存の従業員を解雇し、変化した環境により適した従業員を採用することによって調整を行う日本企業は一般的にはそれほど多くはありません。そのような中で、昨今金融業界においてメガバンクを中心とする銀行が人員や業務量削減の計画を発表していることは、これまでにない大きな環境の変化を示唆していると考えられます。このような技術的な環境変化の局面においては、従来のやり方で成功しているような企業ほどむしろ変化に対応しづらいというジレンマに陥ってしまうこともある中で、このような重大な意思決定を行った銀行の今後の戦略やその成果をベースにした経営学分野の研究がこれから蓄積されていくと思われます。

経営学では、例えば「なぜある企業が成功しているのか」といった現象に注目し、その背後で何が起こっているのか、どのような要因がそれに影響を与えているのか様々なデータを用いて多角的に検討していきます。本学に着任するまでは、企業の戦略に外部環境の変化や競合企業の戦略等の外部要因だけでなく、組織内部の要因がどのように影響しているのかを中心に研究を行ってきました。着任2年目の現在では、より地域や大学に密着した課題の調査・研究を主に行っています。具体的には、①本学で社会人女性を対象として実施している「イノベーション創出力を持った女性リーダー育成プログラム」を事例とした越境学習の教育効果の検証、②企業の社会的責任の観点からの高齢者の買い物支援（福岡市東区委託研究事業）について研究を進めています。どちらも今年度が初年度であり、これから調査結果をまとめていく段階にありますが、福岡県の公立大学である本学であるからこそ必要とされている研究に今後とも取り組み、地域に開かれた研究室を目指して活動を行っています。

国際教養学科
国際経済・マネジメントコース
経営学研究室
講師 櫻木 理江

九州大学経済学部卒業後、一橋大学大学院商学研究科で博士前期・後期課程を修了。2018年4月に本学に着任。組織論やマーケティング戦略が専門。

世界歴史探究！

近・現代史のすきまを埋めよう

～韓国編～

『韓国のナショナル・アイデンティティとしての「反日」』

岡 克彦＝文

二〇一八年十月の徴用工問題に対する韓国の大法院判決を契機に日韓の間では、日本による主力輸出品目の規制たる経済問題が生じ、さらにはGSOMIA（軍事情報包括保護協定）といった安全保障の分野にまで「反日問題」が影響している。最近の両国は、今まで最も悪化した関係にあるといわれるほどである。戦後すでに七五年近く時間が経過しているにもかかわらず、韓国では「反日問題」が鎮静化するよりも、さらに過激になっている感がある。不可思議なのは、韓国では「反日問題」が事あるごとにどうして反復されるのだろうか、という点である。その原因は、単に反日現象を突き動かしている韓国の市民や国民の意識レベルだけに求めることができない。より本質的なところにその要因がありそうである。それは何であろうか。

結論からいうと、その要因のひとつは、現在の「大韓民国」という国家そのものが植民地支配した「日本」との対抗関係のなかから歴史的に形づくられたという事実にある。筆者の専門である憲政史の観点からこの事実を紐解いてみよう。「憲法」という法律は、単に基本的人権や国家の統治機構だけを規定しているのではない。国の成り立ちやそのビジョンを示した国家理念などが織り込まれた国家の基本法でもある。多くの場合、憲法の前文にそれぞれの国の物語（ナショナル・ストーリー）が書かれている。

韓国の場合、建国時に制定された制憲憲法（四八年憲法）の前文には、「悠久な歴史と伝統に輝く我が大韓国民は、乙未三一運動（注：一九一三年の三・一独立運動）により大韓民国を建立し、世界に宣布した偉大な独立精神を継承」したと記されていた。その後、この憲法は五回の全面改正を含め九回にわたって改正された。現憲法（八七年憲法）の前文にも同じ趣旨のことばが書かれている。韓国側の理解では、日本の植民地時代にあっても三・一運動により日本国から独立して大韓民国がすでに存在していたとの認識である。その実体が一九一九年に中国の上海で樹立した「大韓民国臨時政府」（以下、「臨時政府」という。）という存在と共に制定された「大韓民国臨時憲法」（以下、「臨時憲法」という。）である。現在の大韓民国という国家は、この臨時政府と臨時憲法にその淵源を有している。

ところが、ここで最も大きな問題は、憲法の規範対象であり、かつ、政府として統治すべき実体である「国家と国家権力」がそもそも存在しなかったことである。当時、朝鮮半島の全域は、以下で述べるように韓国併合条約によりすでに異民族である日本の統治下にあったからである。国家が存在しないにもかかわらず、どうして政府や憲法がつくられたのだろうか。国家という実体のない憲法が制定されたねらいはどこにあったのかがここで問われている。

当時の韓国の識者たちは、日本によって奪われた国を再び取り戻すことに何よりも心血を注いだ。その現れが臨時政府の樹立であったり、臨時憲法の制定であったりしたことである。この憲法には、国権を回復するための施策と新国家の構想が示されていた。その特徴は、君主制の復活を国権回復の骨子とせずに、むしろ君主制を否定して民主共和制を新国家の政体としたことである。一九一〇年八月に朝鮮王朝（大韓帝国）の国王が自国の主権を日本国の天皇に移譲するというかたちで韓国併合条約が締結された（同条約一条）。朝鮮国王が自らの主権を放棄することで、異民族の支配が朝鮮半島に及んだ。当時、「朝鮮」という空間は、いわば君主制という政体を支えていた伝統的正統性が他国の君主によって主権が奪われることで失われてしまった。その結果、君主制で成り立っていた王朝国家は消滅した。

したがって、失われた国権を取り戻すためには、朝鮮の君主による日本への主権移譲そのものが無効であったと主張する必要がある。その前提としてまずは、国家の主権が国王にあるのではなく、主権の主体を君主以外の者に転換させる別の論理構成と装置を構築することが求められた。それが臨時憲法で構想された人民主権論と民主共和制の論理である（同法一条及び二条）。朝鮮半島の主権が朝鮮の人民にあり、人民の総体的な集合体たる朝鮮民族に国権の淵源があるとの論理を展開した。ここに日本によって植民地化された朝鮮王朝との関係が断ち切られるとともに、主権者たる人民の意思に反する植民地支配を否定し、同支配の主体たる日本に抵抗することができる論理的な名目が与えられた。このことは、今日の大韓民国という国家が要するに植民地支配する日本に対抗するために構築された人民主権論によってもたらされる民主的な正統性（民主主義）にもとづいて樹立したことを歴史的に物語っている。現代の韓国で反日問題と民主主義がよく結びつけられて論じられる傾向が見られるのもこの点に由来する。

人民主権論の意義はこれだけに止まらない。より根本的な問題がある。それは新たな国家の政治体制として「民主共和制」を採用したことである。この政体は、主権の主体である人民により選出された議員で構成した議会（議制院）が国家の意思決定を行い、かつ、同議会で選任した大統領が国家を代表してその権限を行使する仕組みである。この政体を採ろうとしたねらいは、単に朝鮮王朝の君主制を否定するだけではない。それ以上に朝鮮半島の支配者たる日本の天皇制（君主制）に対抗するためでもある。現に植民地としてわが国土を統治している外勢たる日本の天皇制を打破する目的が含まれていた。朝鮮半島は、自国の君主の脆弱さによって国権が失われ、異民族の君主の力によって支配されてしまった。君主制の弊害が植民地問題を誘発したともいえる。臨時憲法で「民主共和制」を国家の形態と規定したのは、内政および外政のいずれにも限らず、君主制という政治形態そのものを否定することを意味していた（同法一条）。現在の大韓民国憲法でも、君主制に内在している歴史的な問題性を踏まえつつ「民主共和制」を堅持している（同法一条）。

とはいえ、韓国憲法で共和制の理念を掲げつつも、現実は君主制の一変型である、大統領という機関を利用して一人の為政者が強権的に国民の政治参加を著しく制限した「権威主義体制」が建国後、直ちに出来上がってしまった。一九六一年五月の軍事クーデターによる軍事政権の出現は、武力で国権を掌握することで民主共和制の理念からは益々かけ離れていった。一九八七年には民主化が実現し、ようやくこの共和制の理想に近づきつつある。けれども、民主化以降も歴代の大統領による不祥事が繰り返され、君主制や大統領制に含まれた歴史的な負の慣性がいまだに持続している。他方、民族的な宿願であった民族統一を目指しつつも、北朝鮮の世襲的な社会主義体制と民主共和制という韓国の国家理念との矛盾をどのように埋め合わせていくのかとの難題がある。「未完」に止まっている民主共和制が今後、朝鮮半島においていかに成し遂げられるのかに注目したい。

PROFILE
［執筆者プロフィール］

名古屋大学大学院法学研究科・教授
福岡女子大学・元教授
岡 克彦（おか かつひこ）

北東アジアにおいて、LGBTに代表される性的マイノリティに関する法的地位および人権救済のあり方などを研究。また、韓国で重要な政治問題が、国会や行政府といった政治過程ではなく、憲法裁判所や通常の裁判所たる司法過程でその解決を図ろうとする「司法の政治化」現象の研究を行っている。著書に『「家族」という韓国の装置―血縁社会の法的なメカニズムとその変化』（三省堂、2017年）などがある。

2019.11.24

The World of Japanese Contemporary Culture Program (WJC) 開講10周年記念行事

WJCは国際文理学部発足を記念して開講した本学の国際教育の柱となる外国人短期留学プログラムです。海外の若者が関心を寄せるアニメ、映画等の現代日本文化をテーマとし、英語で教授しています。開講10周年を迎え、現役WJC生、修了生及び国内外関係者約90名の出席のもとに記念式典を開催し、小川洋福岡県知事から祝辞を賜りました。式典に続く国際教育フォーラムでは、向井剛・四国大学教授（福女大名誉教授）による基調講演の後、海外協定校代表及び本学の新開章司副学長が各大学の国際教育の取組を紹介し、有益な情報交換の機会となりました。国際教育活動は教育の質向上に大きな役割を果たします。本学は、これからもWJCを原動力として、教育の国際展開を推進していきます。

2019.12.02-12.06

留学相談会を実施

交換留学を目指す学生を対象に、留学相談会を実施しました。参加した約50名の学生は、留学経験者から直接留学先の情報やアドバイスを聞くことができ、留学に向けて更に意欲を高める機会となりました。

2019.11.26-11.28

QS-APPLE2019福岡大会に参加

QS-APPLEは世界大学ランキングを運営するQS社が開催する国際会議です。初の日本開催となった2019大会は福岡で開催され、本学は14大学と日本学生支援機構で構成する日本合同ブースに参加しました。

2019.11.23

むなかた環境フェスタ2019

宗像市のメイトム宗像にて、福岡県地球温暖化防止活動推進センターとの共同企画「COOL CHOICE 体験（VR クイズなど）と不要化粧品を用いたアート体験」を行いました。環境生活学研究室の教員・学生６名が企画・参加しました。

2019.12.14

G20財務大臣・中央銀行総裁会議、ラグビーワールドカップを終えて

４月から国際会議の開催支援を目的とした「MICE×グローバル人材研修プログラム」に参加し、G20やラグビーワールドカップの運営に携わりました。G20では会議出席者に、ラグビーワールドカップでは各国のメディアに福岡の魅力を伝える役割を担いました。事前研修や英語力を生かしてなんとか案内をすることができましたが、福岡に関する知識が不十分であったため満足いく案内はできませんでした。この経験を通して「英語はあくまでも必要最低条件であり、重要なのは知識である」ということを学ぶことができました。

▲右:執筆者（川辺利菜）

2019.12.08

大学美術館と地域の文化・歴史をつなぐ [第1回]博多港まちあるきアート鑑賞那の津往還今昔

博多港に立つ巨大なモニュメント「那の津往還」は戦後の引揚記念碑として1996年に豊福知徳氏により制作されました。本企画では「那の津往還-2014」（福岡女子大学）と「那の津往還」（博多港）の双方を鑑賞し、多様な背景を持つ参加者とともに、アートの力と地域の歴史と記憶をたどり、これからの新しいまちのコミュニティについて考え、意見交換を行いました。

2019.12.08 / 12.21 / 2020.01.18

アートマネジメント講座 受講生企画

12月8日（日）「暗闇ねんど遊び」

ワークショップの前半は視覚に障がいのある方の介助体験と当事者である講師によるレクチャーを行い、後半はアイマスクをして「音」からイメージすることを粘土で表現し、参加者で共有しました。

▲視覚に障がいのある講師による介助レクチャー

▲アイマスクをして音からイメージして粘土でつくる

12月21日（土）・1月18日（土）「演劇コミュニケーションワークショップ」

宗像市の福祉施設の中高生を対象に、講師と本学学生も参加し、コミュニケーションについて演劇的手法を取り入れながら学びました。1回目は福岡女子大学で、2回目は福祉施設で開催し、2回行うことにより子供たちの成長をみることができました。

▲演劇コミュニケーションワークショップ2（1/18）

2020.01.09-01.10

JUNBA2020

米国のサンフランシスコで開催されたJUNBA2020「大学を変える　ファンドレイジング～米国から学ぶリーダーシップと同窓生を中心としたコミュニティ作り～」に梶山千里理事長兼学長が参加しました。大学のファンドレイジングに関する米国大学の戦略を学ぶとともに、ファンドレイジングに係る学長等のリーダーシップのあり方や同窓生等との関係作りの方策について、参加大学間で議論を深めました。

2020.01.14

体験学習合同報告会&受入先担当者を迎えたトークセッションを開催しました

３年目となる合同報告会は5つの国内プログラム履修生がそれぞれの気づきや学びを発表しました。トークセッションは「『リーダーシップ』は現場体験でいかに育まれるか」がテーマ。当日の様子は西日本新聞にも取り上げられました。

2020.01.06-01.12

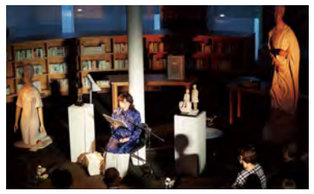
タイ国際共同教育研究推進プログラム

マヒドン大学環境資源学部（タイ）との連携で、昨年度に続き2回目の研修を開催しました。環境生活学研究室の教員・学生と環境科学科の教員・学生が参加しました。フードロスの国際共同研究を検討した他、タイの森川海の自然や環境活動を視察しました。

2019.12.14

朗読と彫刻で紡ぐ 冬ー夜の物語 ー灯りに包まれてー

片山博詞氏の彫刻とともに、岩村朋子氏による詩の朗読が松下美紀氏の灯りに包まれて行われました。オカリナによる演奏もあり、参加者約130名が酔いしれるひとときとなりました。第一部「彫刻に寄せて」では片山博詞氏の彫刻に寄せた詩が詠まれ、第二部「そしていのちについて」では命の尊さをうたいました。



2020.01.16 / 01.21 / 01.22

学生委員が発信した「私のリーダーシップ向上物語」

教職員委員会に参画する学生委員が、活動を通じた「リーダーシップ」や「リーダー像」への理解の変容や深化を語る会を3回に分けて開催しました。多様な実践の中からも、リーダーシップは権力でも性格でもなく「行動」であるという共通の気づきが見てとれました。

2020.01.22

WJCプログラム 日本文化特別講演会

福岡県出身の講談師、神田紅氏（日本講談協会会長）を講師に招き、古典講談「鉢の木」、怪談「牡丹灯篭」、「名乗り」等の様々な題材で実技も交えながら講談の魅力を解説していただきました。質疑応答では、講談という伝統芸能の世界で女流講談師の地位確立のため、挑戦と努力を続けてこられた神田氏のお話に、留学生たちは女性リーダーとして成長するための学びを深めました。

2020.02.15

社会人学び直しプログラム「イノベーション創出力を持った女性リーダー育成プログラム」成果発表会・修了式を実施

2月15日（土）社会人学び直しプログラム「イノベーション創出力を持った女性リーダー育成プログラム」の成果発表会を行いました。モジュール1では「場づくり」「ファシリテーションスキル」を、モジュール2では問題解決の手段として講座・フィールドワークを通し、「デザイン思考」「マーケティング」を学び、モジュール3では1人1人が抱える問題意識をテーマに、問題を解決するためのプロジェクトを実践しました。全11チームから「プラットフォームづくり」「コミュニケーションツールづくり」「食と健康」「組織づくり」「保育現場の環境改善」「里親問題」等、最終11テーマ。多様な発表が行われ、第5期生16名がプログラムを修了しました。

福岡女子大学2020年度公開講座

［受講料］各回 500円　※高校生無料

講座番号		実施日	タイトル	概要	講師
A 健康的で快適な住環境	A-1	5/27（水） 10:00～11:30	健康的な光環境とは	国際ガン研究機関は生体リズムが乱れるシフトワークを「恐らく発がん性がある」と定義している。ヒトの生体リズムは光から最も強く影響を受けることから、ヒトに適した光環境について紹介します。	小崎 智照 （環境科学科准教授）
	A-2	12/16（水） 10:00～11:30	省エネ・快適な生活空間の空気環境	人の日常生活が営まれている生活空間の空気質の現状、空気中に含まれる熱や汚染物質の挙動や評価方法、省エネルギーで快適な環境を維持するための制御方法などについて実際の研究を元に解説します。	鄭 朱娟 （環境科学科助教）
B 自分メンテナンス！③	B-1	6/25（木） 10:00～11:30	体内の掃除と病気	なぜ、癌や認知症などを患うのか？疾患と体内（細胞内）の掃除について紹介します。また、遺伝子組み換え食品を食べても良いのか？に関する情報も提供いたします。	奥村 文彦 （食・健康学科准教授）
	B-2	9/16（水） 10:30～12:00 ※開講時間にご注意ください。	おいしく減塩 ～うま味の効果を体験しよう～	世間では“減塩=不味い”イメージが強く、積極的に減塩に取り組む人は多くありません。しかし、うま味を上手に使うと、おいしさを保ちながら減塩することが可能です。うま味の効果を体験してみませんか？	森田 理恵子 （食・健康学科助手）
C 知の発信2020	C-1	10/14（水） 10:00～11:30	私たちの消費と経済効果 －産業連関分析による推計－	オリンピックなどのイベントの経済効果についてニュースで耳にする機会があります。この経済効果がどのように推計されているのかを紹介し、私たちの消費がどのように経済に影響を与えているのか理解を深めます。	白新田 佳代子 （国際教養学科講師）
	C-2	2021年 2/8（月） 10:00～11:30	八幡宮からみる 九州中世史	九州には、多くの参拝者が訪れる有名な八幡宮がいくつもあります。それら九州の八幡宮の歴史を紐解くと、どのような地域の歴史がみえてくるのでしょうか？身近な八幡宮に注目して九州の中世史を考えます。	渡邉 俊 （国際教養学科准教授）

社会人学び直しプログラム

イノベーション創出力を持った女性リーダー育成プログラム

2020年度プログラムのご案内

「イノベーション創出力を持った女性リーダー育成プログラム」2020年度プログラムが完成いたしました。政府の推奨、働き方改革の影響を受け、社会人の学び直し、リカレント教育への注目がますます高まっております。1月25日の講座説明会では、定員を大幅に超えるお申込みを頂きました。2020年度は、価値観の違いを乗り越えることをより重視した、「対話型コミュニケーション」を導入。受講生より人気の高い、大学教員による専門的講義とグループワークが融合した、モジュール2「創造性を磨く（デザイン思考実践）」は引き続き実施いたします。

2020年度もよろしくお願いいたします。

［イノベーション創出力を持った女性リーダー育成プログラムHP］
http://www.fwu.ac.jp/manabi/

［募集要項］
http://www.fwu.ac.jp/manabi/youkou/

お申込みはこちらから

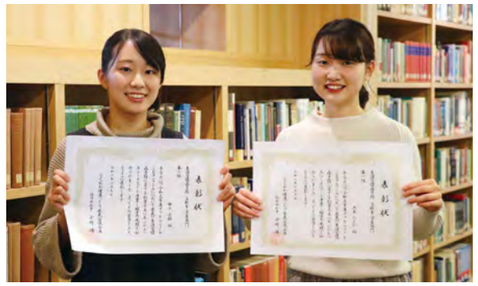
実用英語技能検定1級に合格

11月に行われた実用英語技能検定において、本学学生が1級に合格しました。

国際教養学科4年
川辺 利菜

「チャレンジ！レシピコンクール」の高校生・学生部門の生活習慣病予防に関するレシピにおいて、1位、2位を受賞

福岡県と県栄養士会が連携し、家庭でのヘルシーメニューの普及を図るため「チャレンジ！レシピコンクール」を行っています。今回は、「野菜もう一皿、塩分ひかえめで！」をテーマに開催され、高校生・学生部門の生活習慣病予防に資するレシピにおいて、本学学生が1位、2位を受賞しました。



1位「小さな工夫で健康を！わくわく巾着定食」
食・健康学科3年　大木 のどか（写真右）

2位「野菜たっぷり！秋のカフェ風プレートごはん」
食・健康学科3年　田上 未紗（写真左）

「早良区サザエさん通り食育レシピ」にて入賞

福岡市早良区保健福祉センターでは、早良区に誕生した「サザエさん通り」にちなみ、明るく、元気なサザエさん一家の食卓をイメージした食育レシピ集を作成し、食育推進に活用しています。これまでに作成した幼児期・子ども期、若者期、成人期に続き、今年度新たに「高齢期向け」（概ね70歳以上を想定）のレシピの募集が行われ、本学学生が入賞しました。

食・健康学科3年
山崎 早梨亜

アイシン精機が福岡市博多区に新拠点を発表し、ふくおかISTと立地協定を締結

12月5日（木）にアイシン精機株式会社が人口知能（AI）特化の研究開発拠点を福岡市博多区に新設することを発表し、公益財団法人福岡県産業・科学技術振興財団（ふくおかIST）と新開発拠点の立地協定を締結した。本学の梶山千里理事長・学長が、ふくおかISTの理事長として、締結式に出席しました。

櫻木ゼミ3年生が6大学インターゼミに参加し、総合3位、内容面優秀賞を受賞しました

九州大学鷲崎ゼミ、関西大学西村ゼミ、公立鳥取環境大学谷口ゼミ、流通経済大学長澤ゼミ、西南学院大学小野寺ゼミと本学櫻木ゼミで6大学インターゼミを行いました。櫻木ゼミから出場の2チームが総合3位、内容面優秀賞を受賞しました。

国際教養学科 講師
櫻木 理江
（上段右）

国際教養学科 3年
余 信栄　田中 真衣
今水 友梨　瓜生 菜々美
渋谷 実穂　河野 瑞希
日越 あゆ　川崎 有紗
（上段左から）（下段左から）

「第8回京都女子大学ドイツ語俳句コンテスト2019」で特別賞を受賞

京都女子大学が主催する「ドイツ語俳句コンテスト」において、本学学生が特別賞を受賞しました。

特別賞俳句

Glühwürmchen leuchten.
An dem anderen Ufer,
steht Opas Schatten.

蛍照る　川の彼方に　祖父の影

国際教養学科2年
祝影紅

退職者からのメッセージ

変化を楽しむ

平成5年の文学研究科開設時に着任してから四半世紀が過ぎ、新学部と新大学院の開設等、大きな変革がありました。古代文学専攻でありながら〈新しもん好き〉な私にとって刺激的な歳月でした。若い頃から温めていた万葉時代の〈外交〉や〈コミュニケーション手段〉についての発想が息を吹き返したことも事実です。状況の変化によって、人生の目標を変えざるを得ないこともありましたが、「理想」を捨てずに過ごせたのは甚だ幸せなことでした。いつも味方になって下さった皆さまに感謝します。

国際教養学科　教授
月野　文子
［在職期間／1993年4月～2020年3月］

恐れずに大きな一歩を

2016年から、EYHプログラムを立ち上げて、国内外の長期学外学修や地域共創論を通じて、皆さんに良い学びの経験を提供できたかと思います。

このプログラムを通じて、やってみたいけど自信がない、と迷いながらも挑戦し、最終的には、とてもいい経験ができて成長できた学生たちにたくさん出会えて、とても良い日々を送ることができました。

これからも恐れずに、できるだけ多くの「大学時代にしかできないこと」を経験してください。

大学教育再生加速プログラム(AP)推進室　准教授
湯田　ミノリ［在職期間／2016年6月～2020年3月］

新しい環境にも恐れず飛び込む

IT企業から教員への転身で、最初は慣れないことも多く戸惑いもありましたが、まわりの方々の温かいご支援によって、非常に濃密で充実した日々を過ごすことができました。関係者の皆様には深く感謝いたします。授業では回を進めるごとにどんどん新しいことを習得し、表現していく学生のみなさんの姿が頼もしく励みになりました。また、就活支援をする機会もあり、志望の会社に決まりました！という嬉しい声を聞くこともできました。これからは、福岡女子大学で頂いたご縁を大切にして、教育に研究にと邁進していきたいと考えています。短い間でしたが、本当にありがとうございました。

共通教育機構　情報活用担当　准教授
IR・情報化推進センター　副センター長
三好　きよみ［在職期間／2019年4月～2020年3月］

まだ見ぬ世代へ

もし大学で学べる幸運を感じることがありましたら、その想いを胸に、どうすれば「まだ見ぬ世代」が幸福に暮らすことができるか、そのためには何をすればよいのか、と考えてみてください。それが、やがてあなた方に、かけがえのない利益と幸福をもたらすはずです。

我々は幸福になるために、大学で学んでいるのですから。

国際教養学科　教授
今井　明
［在職期間／1992年4月～2020年3月］

卒業しても戻ってきたい母校との「絆」づくり

8 年半にわたり教鞭をとってきた本学を昨年の 9 月に退職しました。何よりも忘れられないのは専門演習で学生との学問交流がとても盛り上がったことです。毎回、ゼミ生同士の自由闊達な議論で未知なる論点にまで深堀りができました。実に面白かった。卒論完成までの協同学習のメソッドがある程度、出来上がったのも彼女たちのおかげです。巣立った卒業生たちの交流は今も続いています。これからも福岡女子大学の益々の発展をお祈りいたします。

国際教養学科　教授　**岡　克彦**
［在職期間／2011年4月～2019年9月］

「もう一つの眼」を育て、磨きましょう

「もう一つの眼」とは、想像力と言い換えてもいいでしょう。それは新たな自分を構想する力ですし、他者の気持ちに思いをいたすことです。支配的なものの見方にたいして、オールタナティヴな可能性を探求することでもあります。国際化が喧伝されるなかにあっても、路傍のささやかな草花の美しさに気づくまなざしを忘れないようであればいいですね。

2年間という短いあいだでしたが、ありがとうございました。福岡女子大学のみなさまのご健康、ご活躍を祈念いたします。

国際教養学科　教授
小谷　耕二
［在職期間／2018年4月～2020年3月］

留学生と共に学んで豊かな大学生活を！

福岡女子大学が多くの留学生を受け入れるようになって10年。今、寮生活で、クラスの中で、サークルや様々な活動の中で、留学生と共に過ごすことは、この大学の日常になっています。しかし、本当に知り合っていますか。ほかの国の言葉や文化、社会を知ることは、自分の国の言葉や文化、社会を再発見することです。皆さんのお互いの交流からインターネットなどでは得ることができない深い豊かな気づきが生まれることを願っています。

共通教育機構
学術日本語プログラム担当
講師　国際化推進センター長
川邊　理恵
［在職期間／2010年4月～2020年3月］

A positive “I can” attitude will work!

I'd like to extend my gratitude to all the staff and students who made my time at Joshidai so enjoyable. I will deeply miss working at Fukuoka Women's University. Thank you!

I'd like every student at the university to know that the most important lesson I learned at FWU is that believing you can succeed leads to success. This is true for learning any subject.
Knowing what you can do helps you to learn the things that you can't do yet - plan and take positive steps to master that skill.

Good luck in your futures and thank you!

共通教育機構
学術英語プログラム担当　講師　**Scott SMITH**
［在職期間／2016年10月～2020年3月］

Vision Passion Action

『次代の女性リーダーへ』
明るく大きな夢を抱き 好奇心を持って 豊かな感性を身につけ
健康に恵まれ 大きく世界に羽ばたいていかれることを祈念します。

『Inspire Integrate Innovate』
毎日の努力と人の和 多様な考え方を持つチームが
大きな力を生む。

『Learn How to Learn』
グローバルな世界にあって 知識は日々進化し 豊かになっていきます
持っている知識で何が出来るか 常に新しい方法を追求する
元気な次代の女性リーダーになって下さい。

国際教養学科　教授
山下　哲生
［在職期間／2017年4月～2020年3月］

人事消息（2020.3.31付）

［教員］

退職	国際教養学科	教　授	今井　明
		教　授	小谷　耕二
		教　授	月野　文子
		教　授	Nicholas WARREN
		教　授	山下　哲生
	環境科学科	教　授	森田　健
		准教授	嶋田　大作
	食・健康学科	助　手	西原　百合枝
	共通教育機構	准教授	三好　きよみ
		講　師	川邊　理恵
		講　師	Scott SMITH
	大学教育再生加速プログラム(AP)推進室	准教授	湯田　ミノリ

私たちは小さくともキラリと光る存在でありたい

人間環境学部に修士課程の大学院が設置された年に着任し、その後、国際文理学部になり、大学院博士課程の完成まで20年を福岡女子大学で過ごしました。その間、学部生・大学院生や共同研究者の方々と一緒に学び、研究ができたこと、社会人講座や美術館活動を通して学外の多くのつながりを得たことは幸せでした。そしてこれからも、「私たちは小さくともキラリと光る存在でありたい」と思っています。

環境科学科　教授
森田　健
［在職期間／2000年4月～2020年3月］

多くのことを学ばせて頂いた8年間に感謝

2012年に着任して以来8年間、福岡女子大学でお世話になりました。私にとって初めての教員生活であり、全くの手探りの状態からスタートしました。今でも、まだまだ分からないことばかりではありますが、この8年の間に、教職員の皆さま、学生の皆さんから多くのことを学ばせて頂き、おかげさまで少しは成長できたと思っております。お世話になった方々にこの場をお借りして、お礼申し上げます。ありがとうございました。

環境科学科　准教授　**嶋田　大作**
［在職期間／2012年4月～2020年3月］

Real study is not dull work – it's the passionate pursuit and exciting discovery of knowledge!

Just before coming to work at Fukuoka Women's University eleven years ago, I wondered anxiously whether I would be well received by the students here. I need not have worried! As soon as I started teaching them, I felt greatly encouraged by their eagerness to learn from me, by their enthusiasm for the contents of my lessons, and by their warm appreciation of my very English sense of humour. Over the course of the last decade, I have been inspired again and again by FWU students' thirst for knowledge and enjoyment of learning. I wholeheartedly thank all of them for responding so positively. At the same time, I sincerely thank my FWU colleagues for their great kindness and ever-reliable support.

国際教養学科　教授
Nicholas WARREN
［在職期間／2009年4月～2020年3月］

福岡女子大学100周年記念事業

未来を拓く なでしこの花　－人を育て、知を生かす－

未来を拓く なでしこの花
100th—2023
FUKUOKA WOMEN'S UNIVERSITY

編纂の寄り道

1923年、女子高等教育へのまなざし

福岡女子大学の志願倍率はおよそ4倍で、志願者のうち6割強が福岡県出身だ。あとの4割は全国から集まり、留学生も多く在籍する、地域に密着しつつもグローバルな大学である。

そんな福女大の前身となった、日本初の公立女子専門学校「福岡県立女子専門学校」が開校した1923年は、女子高等教育が始まったばかりの頃だ。現在ほど交通機関も情報網も発達していない時代である。しかも、女子高等教育への進学者はほとんどいない。それにも関わらず女専の第1回の募集では、九州各県の他、中国・四国・近畿、海を越えて朝鮮や台湾などの42校60名を含め、336名が志願した（大正12年3月21日付『福岡日日新聞』）。80名の定員の4倍以上である。この事実は当時の女子の高い向学心を明らかにした。

多くの人の努力により、女子の高等教育は特別なことではなくなった。今、福岡女子大学を選び、ここで学んでいる私たちは、女子教育の歴史を背負うリーダーとして次代を牽引するため、女専生に劣らぬ向学心をもって励んでいく。

第1回 卒業アルバムより

記念誌編纂部会
国際教養学科1年
矢野 さくら

大正十五年三月

◀当時の志願状況を載せた要覧。

記念誌編纂部会活動報告

同窓生の陶山雪代様のご自宅に訪問

2019年11月20日（水）に同窓生の陶山雪代様のご自宅に訪問し、学生時代についてインタビューさせていただきました。陶山様は女専25回生で生活科のご出身です。記念誌編纂部会では以前にもお話を伺いましたが、今回再度インタビューにご協力いただき、学生委員の髙木理央さん、矢野さくらさん、編纂員の井手が聞き手として参加しました。

陶山様は昭和22～25年に在学されていました。空襲で吹きさらしになった市街地を凍える思いで通学し、また田島の学生寮の菜園では、寄宿生のための野菜づくりを手伝っていたそうです。こうした戦後のご苦労に加え、当時女専は大学昇格運動に励んでいました。そのため、勉強できる時間は限られていたといいます。それでも卒業後に教師の道に就き、豊かな人生を送れたことは女専のおかげだと話されていました。

学生生活のお話に聞き手一同で驚いたり笑ったりしているうちに、あっという間に時間が過ぎていきました。インタビュー内容はお借りしたアルバムとともに、百年史の編纂に活用させていただきます。ご協力いただいた陶山様に感謝申し上げます。

陶山雪代様のご自宅にて

◀昭和22～25年の貴重な写真が保存されてます。

寄附報告

福岡女子大学100周年記念事業基金へのご寄附に、心からの感謝を申し上げます。

	件数	寄附額
計	1,157件	138,898,626円

（2020年2月5日現在）

領収書について

2019年10月1日から12月31日までにご寄附いただいた皆様には、2020年1月末頃に「福岡女子大学　百周年記念事業基金寄附金領収書」を発送しております。

この領収書は確定申告時に必要となりますので、大切に保管いただきますようお願いいたします。

また、ご寄附いただいた方で、領収書がまだ届いていない方は、お手数ですが、募金企画部会までご連絡いただきますようお願いいたします。

※企業においては2020年1月末までに領収書を発行したものを含む。

寄附者ご芳名

福岡女子大学100周年記念事業の趣旨にご賛同いただき、多大なご協力・ご支援を賜り、誠にありがとうございます。

2019年10月1日から12月31日までにご寄附いただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます。ご芳名のご公表を希望されない方は掲載しておりません。

今後とも福岡女子大学100周年記念事業への温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

※企業においては2020年1月末までに領収書を発行したものを含む。
※本学ホームページにおいて、寄附開始以降、ご寄附いただいた皆様のご芳名を掲載しております（ご公表を希望されない方を除く）。

1 お名前・寄附金額の掲載について ご了承いただいたご寄附者様

※寄附金額別、五十音順にて掲載させていただきます。
カッコ内の数字は累計寄附金額です。

200万円	株式会社 篠崎様
100万円	（故）森永　泰子様（101万円）
	月野　文子様（200万円）
50万円	石川　豊美様
	須藤　壽恵様（100万円）
20万円	沓掛　裕顕様
	花崎　正子様
10万円	武智　康子様（12万円）
	山﨑　二三代様
5万円	重冨　美紀様（10万円）
1万円	学研三郎丸マンゴー教室様（2万円）
	馬場　広希様（6万円）
	森　信様

2 お名前のみの掲載についてご了承いただいたご寄附者様

※五十音順にて掲載させていただきます。カッコ内の数字は累計寄附回数です。

あ	株式会社IHI様
	石蔵酒造株式会社様
	医療法人社団研英会林眼科病院様
	岩切　真弓様（3）
	梅木　陽子様
	大音　惠子様（2）
か	鹿島建設株式会社九州支店様
	鎌田　迪貞様
	川崎重工業株式会社様
	ケア・ルートサービス株式会社様
	五洋建設株式会社九州支店様
さ	正晃株式会社様
	卒業生有志の会　代表 中野芙美代様
た	株式会社チューケン日本医薬中央研究所様
	トータルケア・システム株式会社様
た	株式会社トクスイコーポレーション様
	冨安　妙子様
な	中田　法正様（5）
	中野　芙美代様（2）
	中山　京子様
は	濱田　美喜世様
	福田　澄江様
	富士ゼロックス福岡株式会社様
	不二熱学工業株式会社様
ま	前田建設工業株式会社様
	松尾建設株式会社様
	村上　たか子様
や	柳瀬　留美様（2）
	山口　亮一様
	吉持　聖子様（2）

お問い合わせはこちら

福岡女子大学100周年記念事業基金(募金)に関すること
〒813-8529　福岡市東区香住ケ丘1-1-1 募金企画部会（学生支援センター内）
TEL：092-661-2418　FAX：092-661-2415　E-mail：100th-bokin@fwu.ac.jp